研　究　紀　要

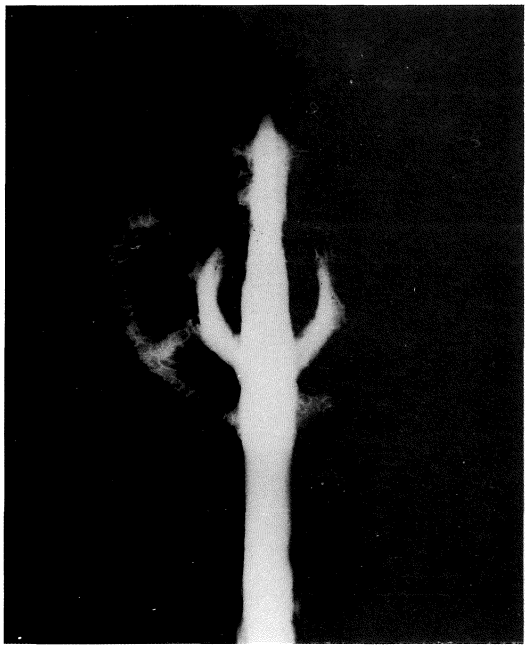
第 8 号

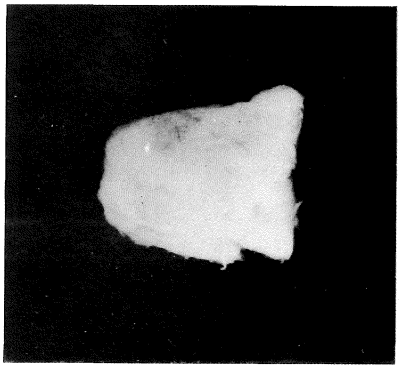
1 9 9 1

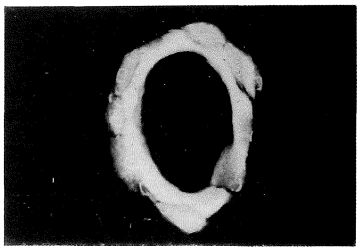
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

巻頭図版

（瀧瀬論文付図）







熊谷市三ヶ尻林４号墳出土銀象嵌装大刀

上　出土状況　　下　Ｘ線写真（左 鐔　右上 鞘尻金具　右下 柄頭縁金具）

目　　次

序

方形周溝墓観察の一視点（１）
大屋　道則……1

溝中土壙小考
福田　　聖……9

関東地方東部における古墳出現期の様相Ⅰ
（古墳出現前夜の様相）　村田　健二……37

関東地方における埴輪祭式の受容
山本　　靖……65

埼玉県の拵付大刀
瀧瀬　芳之……101

「鬼高式土器」の外部
―古墳時代後期福島県域土器群と北部関東土器群の比較検討―
利根川章彦……127

古代武蔵の土師器理解のために
―北武蔵の７・８世紀の様相―　赤熊　浩一……165

古代武蔵の土師器理解のために

― 北武蔵の７・８世紀の様相 ―

赤熊　浩一

はじめに

埼玉県における７・８世紀の土師器研究は、発掘調査の急増とともに資料も増加し、型式学による編年研究が進められてきた。この中で、須恵器坏身と蓋にみられる返りの逆転期、つまり、ＴＫ217型式段階以降の土師器は、地域差はあるものの律令制的土器様相へと変化したとされる。そこには、金属器からの影響により、同一器種による法量の分化と土器様式の変化があげられる。こうしたことから、多くの研究者は、土師器生産の体制や流通機構にまで理解を進めている。

しかし、律令的土器様相とはいったいどのようなものであるのか、地域性の強い土師器の変化を北武蔵地域を中心とする資料を検討しながら再度理解してみる。

器種構成の変化

奈良時代の食器についての研究は、「正倉院文書」および「延喜式」にみられる食器類の記述から出発している。このなかで、食膳用の用器としては、笥・鋺・盤・坏・盞・高坏・柏・瓶・鉢・多羅・箸・匙・鉗があげられる。土師器・須恵器として生産が行われている器種は鋺・盤・坏・盞・高坏・瓶・鉢等であろう。では、こうした器種が、遺跡からどの程度把握することができるのだろうか。実際に竪穴住居跡出土遺物の分析をとおして、器種構成の在り方を時期の変化と合わせて考えてみる。

「将監塚・古井戸」遺跡では、７世紀後半から８世紀前半までの土師器坏について、明瞭に器種の分化と組成について解明することができた。その後、埼玉考古学会の討論「奈良時代前半の須恵器編年とその背景 ― 前内出窯跡その後 ―」のシンポジウムを通して、年代観の検討が加えられた。今回は、更に一歩進めて、当該期の土師器器種構成の在り方をより具体的に解明し、当時の食器構成の把握とその構成が意味するものを理解してみる。

土師器の分析は、将監塚・古井戸遺跡の土器を器種(坏・皿・鉢・壺・甑・甕・台付甕・小型甕)によって分類し、さらに時期によって分類した。これらをもとに、同時期の住居軒数を100とし、それぞれの器種が何軒から出土しているかを折れ線グラフによって表現した（第１図)。また、同一の用途として使用されたと考えられる器種の個体数を棒グラフによって表現してみた。このことは、時期による土器の保有量の客観的に変化を捉えることができ、また、土師器生産との関係を示唆しているものと考える。ここでは、形態（形式）の変化ではなく用途（機能）を分類の基準とした。

坏は、いずれの段階においても出土率は高く、他の器種よりも圧倒的に出土量も多い。坏は、普偏的に生産されていることが理解できる。第９期においては、445個体を数えられ他の時期の約倍である。最も少ないのは２軒しかないため数量における客観性に欠ける第13期を除くと第６期である。第４・５期は多く、第６～８期は落ち込み再び第９期に激増し、第10～12期は比較的安定していることがわかる。

皿は、第４期から第６期まで非常に多く出土していることが把握できる。そして、第７期で一度消滅し、第８期に形態を変えて再び出現し第９期にピークをむかえる。

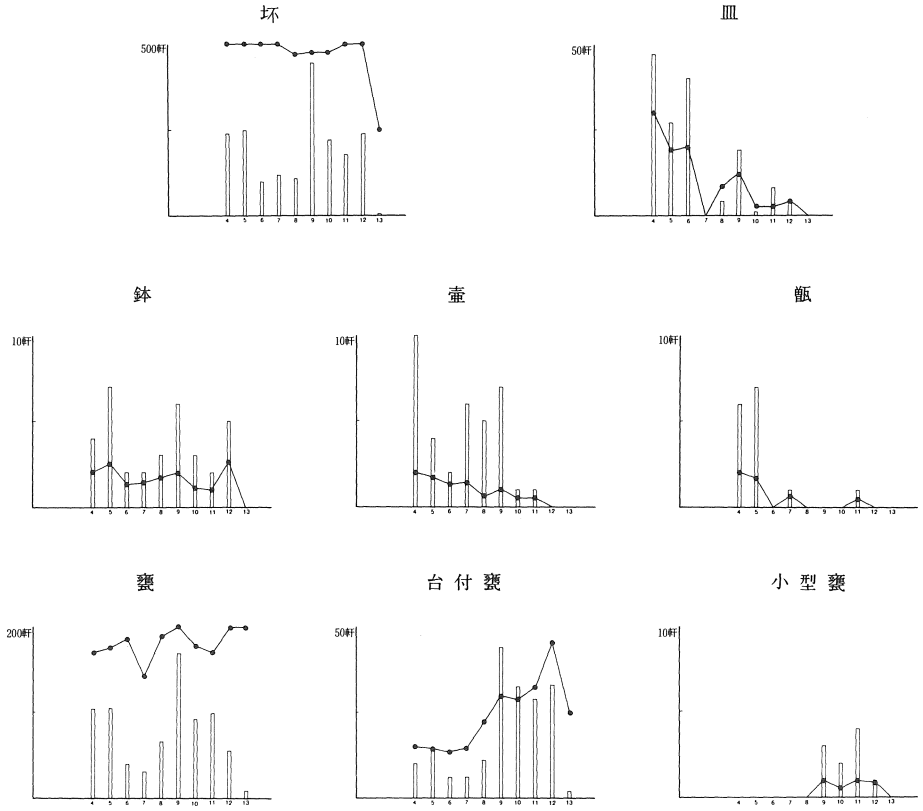
鉢は、どの時期においても少量ながら検出するが、第４・５期と第９期および第12期にやや多く出土する。

壺は、第４期が最も出土率が高く第９期でやや増加するものの徐々に減少化の傾向がうかがえる。

甑は、さらに極端な傾向がみられ、大型甑および鉢型の小型甑を含めて考えても第４・５期は出土率が20％程見られるのに対して他の時期は殆ど出土しない。これに対して、小型台付甕・小型甕の出土率は第８・９期以降顕著な増加現象がみられる。

甕においては坏と同様にどの段階においても出土率は高い。

以上の坏、皿、鉢は土師器供膳具である。坏と鉢は、普偏的器種として捉えられる。しかし、土師器皿においては第７期以降集落内での供給がみられなくなる。このことは、生産体制の状況が変化したためと考えられる。しかも、西氏は『正倉院文書』の中に食器類の器名・用口数を記したものが多数あることを指摘し、勝宝７年５月の越前国田使等解によると「木佐良100」と記され、土師器、須恵器の食器とともに木製の食器類が相当数用いられていたことを指摘している。こうした



第１図　土師器器種別変遷図

ことを考え合わせると、第８・９期にみられる土師器皿や第９期以降の鉢の出現と形態変化の要因は、木佐良や木製鉢の影響が考えられる。

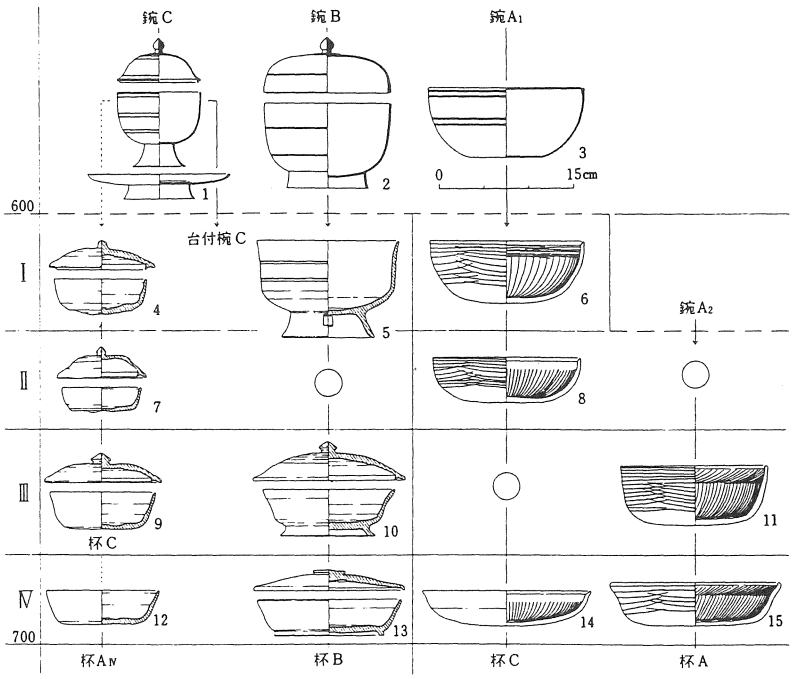
土師器皿について

土師器坏・皿の形態を決定づける要因は須恵器蓋模倣の論理が造り手と使い手の中にこの時期いまだ存在していたのではないだろうかという疑問から皿の理解を検討する。

県内の皿Ｂの様相についてみると、７世紀後半の良好な資料として八幡太神南遺跡２号住居跡があげられる。これは、将監塚・古井戸遺跡の第２期にあたりこの第２期に皿Ａと皿Ｂの出現がみられる。ここで注目したいのは皿Ｂである。第２期から第６期に至るまで連続的に出土し第４・５期では北武蔵地域を中心として増加している。手法の変化は坏と同様に体部のヘラケズリが口縁部にまで施され、器高の深いものが古い要素として捉えられ次第に体部上位に未調整部を持つようになり、器高を浅くする。しかし、土師器坏でみられた器種分化は土師器皿では明瞭に捉えにくく、むしろ、器形の規格性が指摘できる。

周辺遺跡では、皂樹原遺跡・白山遺跡・立野南遺跡・内出遺跡・東川端遺跡等この時期の遺跡からは普偏的に出土を示す。また、県西部の下辻遺跡・稲荷前遺跡からも出土しており広範囲の出土が想定される。

群馬県下での様相はどのような傾向にあるか概観してみると、鳥羽遺跡では、出土土器を第１段階から第19段階まで設定し、この中で、皿の出現は第11段階にみられる。そして、この段階の年代について、綿貫氏は高崎市引間２号墳出土の和同開珎と共伴する須恵器を根拠として、秋間古窯跡・大久保Ａ遺跡の須恵器の組み合わせ例から708年を定点とし年代を与えた。また、荒砥天之宮遺跡では、第Ⅺ期の段階に位置づけている。前段階のⅨ・Ⅹについて、須恵器坏の蓋身のセットは７世紀第３四半期から第４四半期であると考えられており、



第２図　鋺と食器の発展（1・3群馬県　観音塚古墳　2千葉県　金鈴塚古墳　4・9・10大阪府　陶邑ＴＫ217号窯　5埼玉県　稲荷4号墳　6大阪府　難波宮下層遺跡土壙3　7・8奈良県　坂田寺跡池SG100　11大阪府　船橋遺跡　12大阪府　陶邑ＭＴ21号窯　13・14・15奈良県　藤原宮東大溝ＳＤ105）

第XIは、８世紀第１四半期として考えられる。三ツ寺・保渡田遺跡でも第10分類期にやはり皿の出土が存在し同様の時期を示している。しかし、何れの遺跡からも前段階の中に素形を示すような土器群が捉えられない。

では、これほど多くの出土がみられる皿Ｂはどのような存在が示されるのだろうか。出現時期が須恵器坏蓋の返り逆転期以降であることに注目したい。西弘海氏が土器様式の成立の中で示した金属器模倣の問題がある。第３図に見られるように、鋺Ｃの蓋を模倣したものが逆転した須恵器を成立させ、さらに、北武蔵型坏の成立要因をここに求めることを考えたい。そして、鋺Ｂの蓋を模倣したものが皿Ｂ成立の要因もまたここに求めることを考えたい。極輪的理解のしかたではあるがこのようにすると坏・皿の成立要因が金属器を模倣した須恵器を更に模倣し、土師器が成立していることが理解でき古墳時代的観念の脱却が不十分であったことを指摘できる。そうなると、古墳時代の長胴甕の系譜を残す７世紀後半から８世紀前半の長甕の存在も理解できる。そして、８世紀中葉つまり国分寺創建期にこうした生産システムが再編されるが故に皿Ｂの消滅を考えたい。

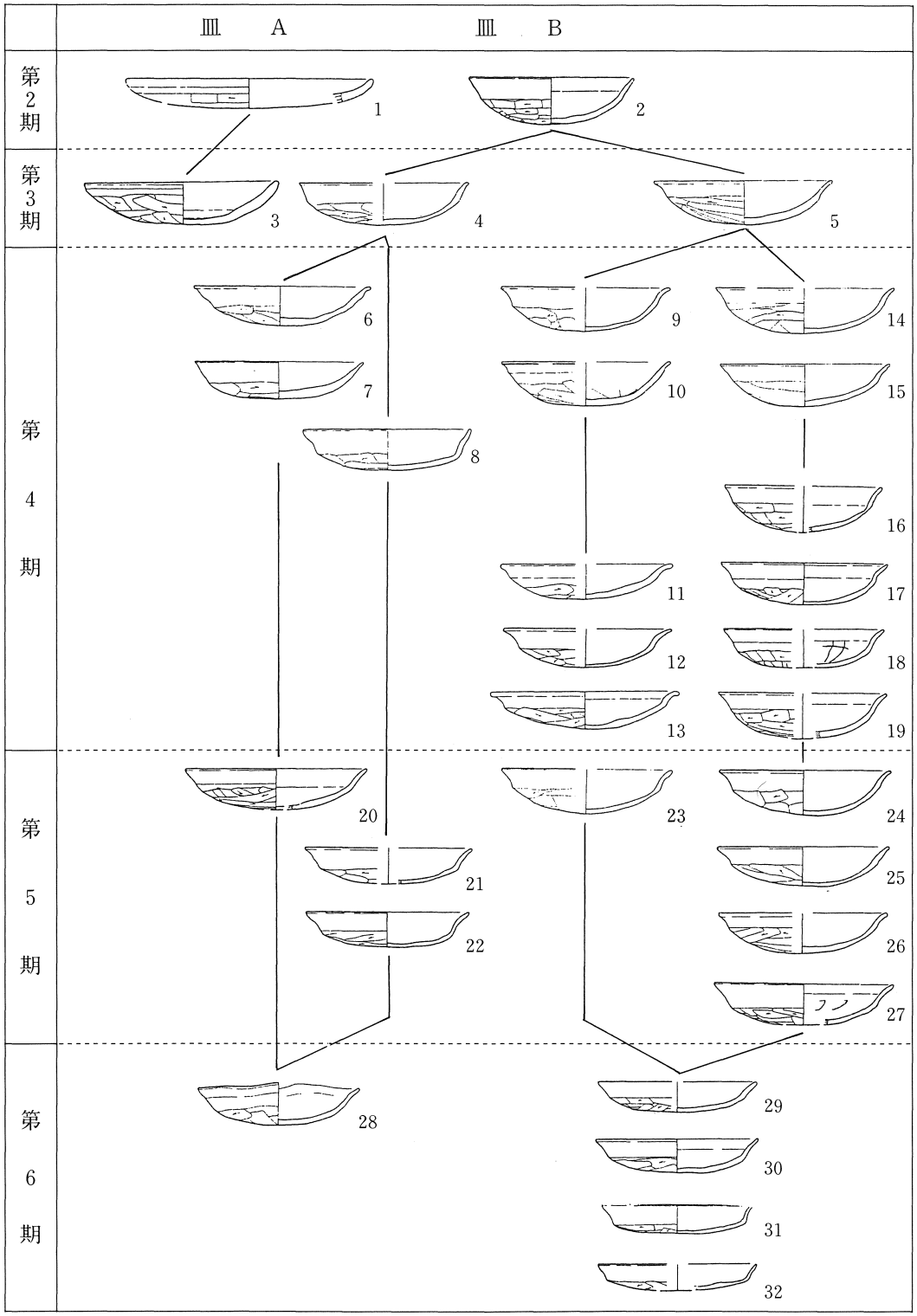
次に、８世紀末葉から９世紀にかけての段階において再び皿が出現してくる。しかし、この皿は短期間の存在としてとらえることができる。まず、顕著な出土を示すのは、将監塚・古井戸遺跡の第155住居跡である。このほか第１図に示した10軒の住居跡および掘立柱建物跡から出土が確認できる。このうち時期の位置づけについて考えると第181号住居跡な児玉編年の第８段階にあたり、第105号住居跡は第10段階にあたる。それ以外の遺構はいずれも第９段階にあり、皿Ｃがこの時期を中心として生産されていたことが窺える。しかも、この形態は、前段階に求めることはできず、形態の連続性に欠ける。一方、周辺の遺跡においてはどのような状況に在るかと言えば、岡部町白山遺跡においてこの皿Ｃを見ることができるだけである。白山遺跡の報告書のなかで中村氏は、第68号住居跡の１の皿をＢ３とし、第10号住居跡の１をＢ４として捉えている。そして、これら皿の伴う土器群を第VI期とし８世紀末から９世紀中頃としている。しかし、この段階は資料がやや少なく今後、注目していきたい。

このようにみてくると、皿は、第１段階から第３段階（７世紀中葉から８世紀初頭）の皿Ａ類、第２段階から第６段階（７世紀第２四半期から８世紀中葉）の皿Ｂ類、そして、第９段階（８世紀末から９世紀前半）の皿Ｃ類が存在する。

皿Ｃ類はその形態からみると厚手の平底で器高は浅く、口縁が短く立ち上がる。底部外面を丁寧にヘラケズリし、口縁部は目の荒い横撫でを施す。木製皿の生産は正倉院文書に木佐良の注文が勝宝７年に行われておりこの時期に中央では土器と合わせて木製皿の生産が普偏的に行われていたことが理解できる。また、中村氏は木製甑の普及を土器に見られる甑の減少傾向から８世紀第４四半期に想定した。こうしたことから、皿Ｃ類の出現は、木製皿の普及に合わせてこれを模倣した一時的形態の土師器皿として考えられはしないだろうか。

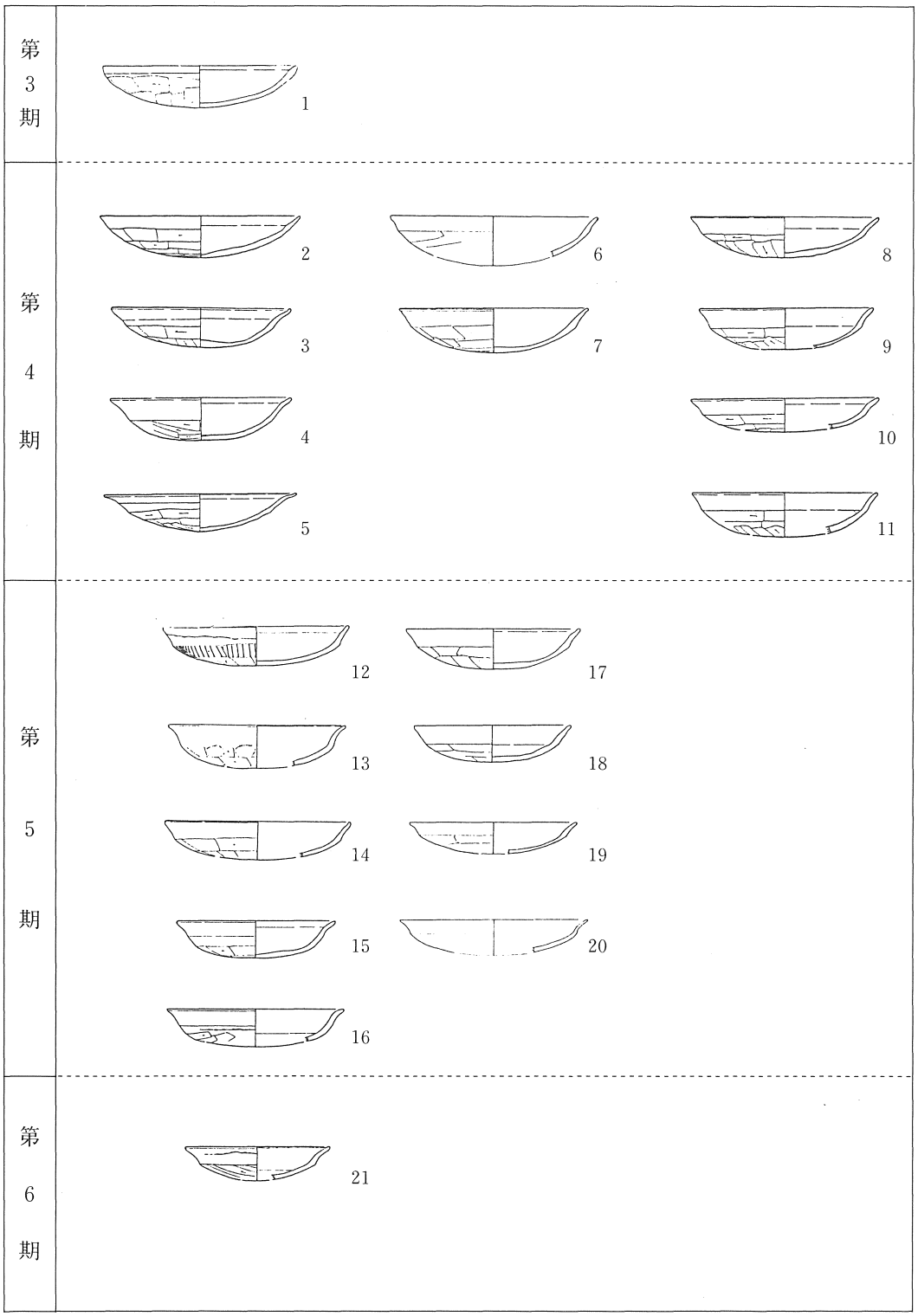
土師器に見られる須恵器模倣形態

模倣坏から「北武蔵型」へ変化する段階の大きな要因は、やはり金属器文化の流入とそれに左右されて須恵器蓋の形態的変化が挙げられる。このことは、非常に在地生産の土師器にとって大きな混乱を招いた要因として理解できる。なぜなら、土師器の形態をどのようにすべきか生産集団には



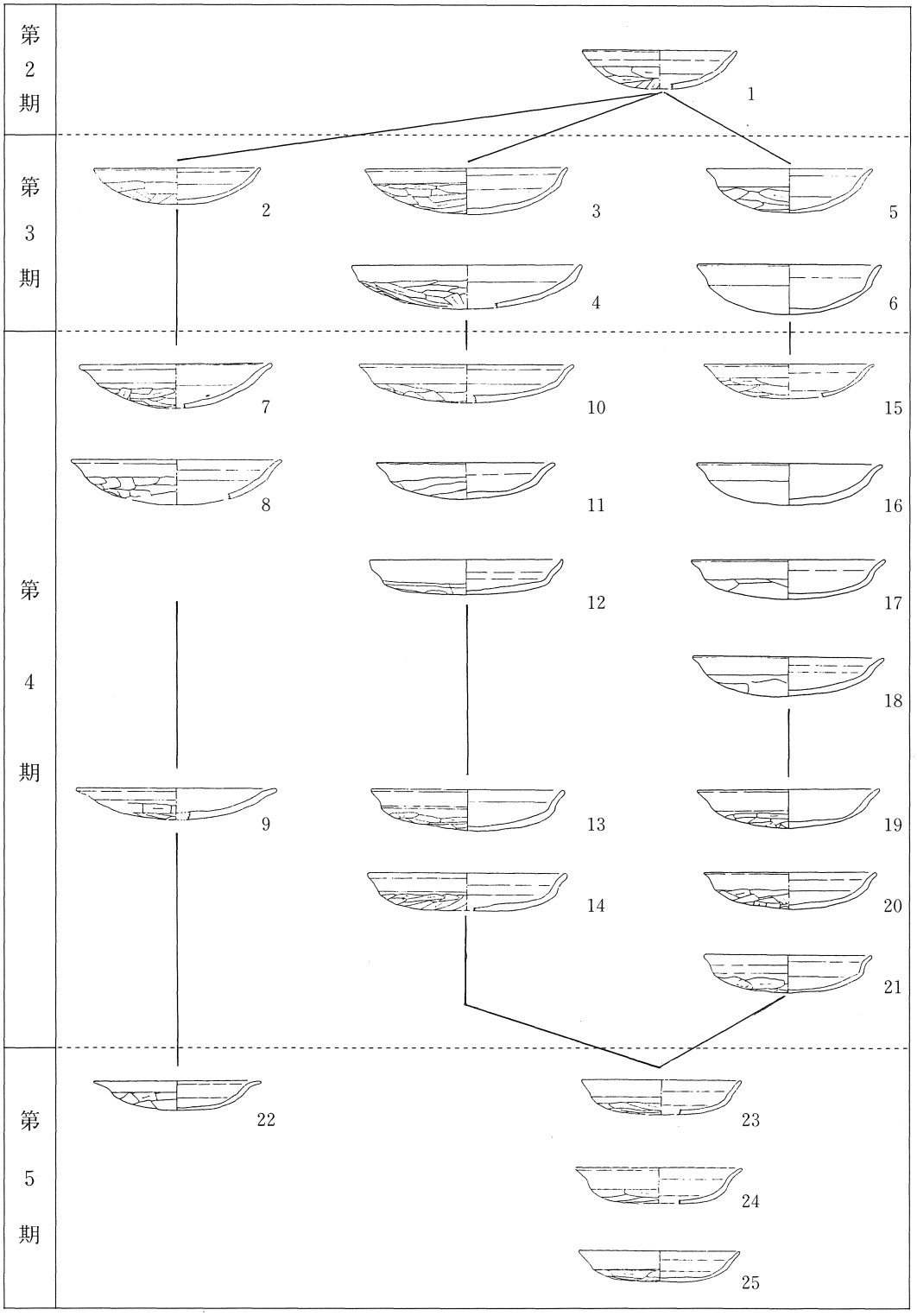
今井G２号住(１)、八幡太神南Ａ１号住(２)、将監塚古井戸160号住(３)、30号住(４)、11号住(５)、76号住(６・８・９)
49号住(７・14・15)、64号住(10)、120号住(16・17・18・19)、121号住(12)、136号住(13)、139号住(11)、137号住(20・26・27)
116号住(21・22)、52号住(23)、60号住(24・25)、28号住(28・30)、109号住(29)

第３図　皿変遷図(1)



白山71号住(1)、白山6号住(2)、立野南2号住(3～5・8～11)、東川端6号住(6)、下辻12号住(7)、下辻18号住(12・13)、下辻19号住(14・15)、小山の上1号住(16)、東川端37号住(17～19)、東川端39号住(20)

第4図　皿変遷図(2)



皂樹原70ｂ(１)、70ａ(２・５・15)、60(３・４)、41(７・８・10)、65(９・13・19)、55(14)、56(20)、27(21)、70ｂ(22～25)、内出13号住(６・11・12・16～18)

第５図　皿変遷図(3)

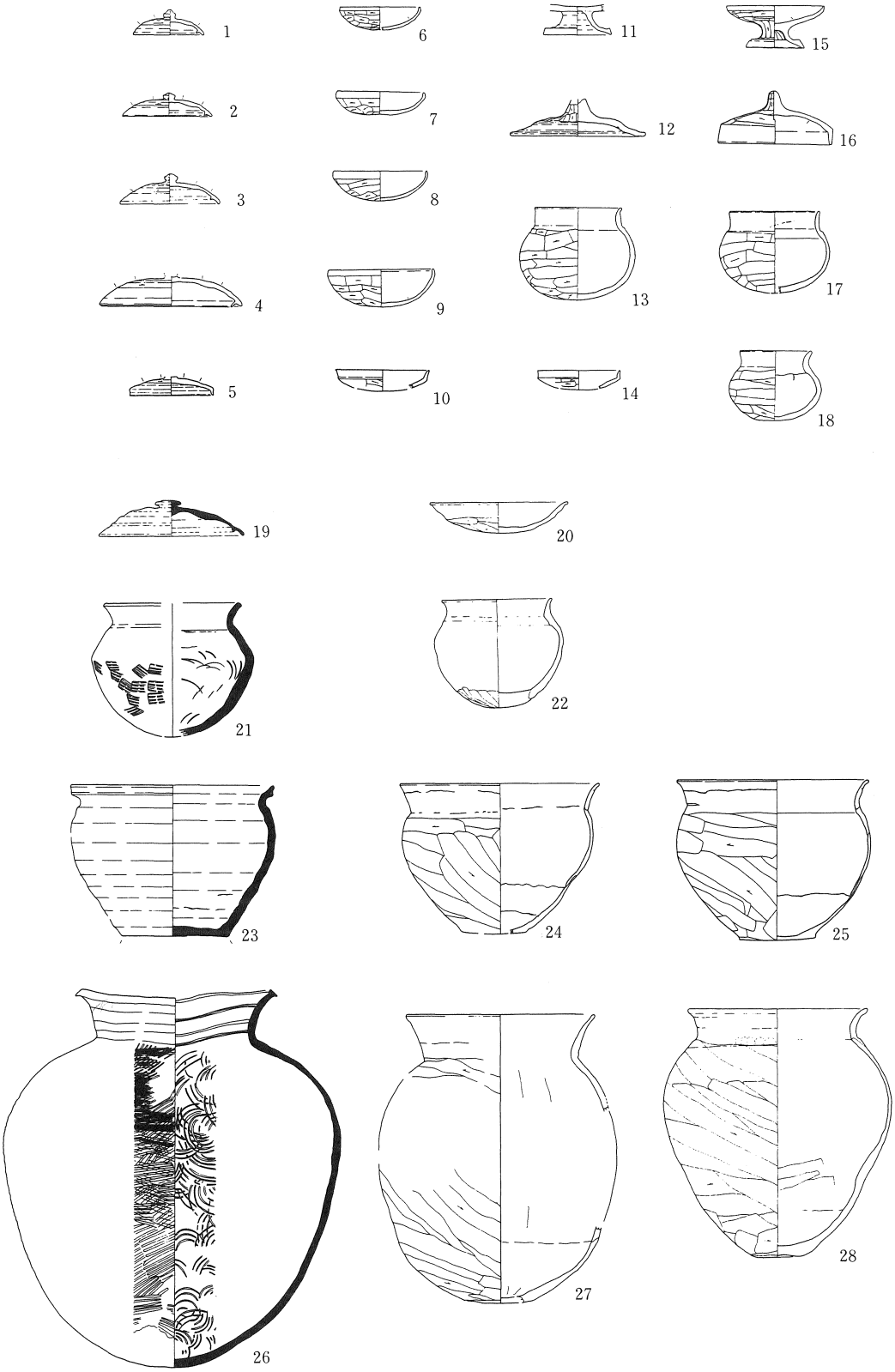
従前の規制概念を再構築する段階として位置づけられる。つまり、北武蔵型坏はこうした新概念の形態である。県西部の比企地域では、比企型坏が古墳時代後半に出現するが、この系統をもつ坏が7世紀後半になると小型化の傾向を示し、口縁部の形態も変化する。また、県東部の利根川右岸地域では、模倣坏が8世紀前半まで主体的に出土している。

7世紀後半以降の土師器を理解していくうえで、律令社会の新たにプログラムされた文化的要素を常に意識している。しかし、いずれの部分に新文化の影響を受け、何れの部分に伝統的文化を継承しているのかを、再認識する必要があり、土師器の変化するプロセスを捉えてみる。

第6図に示した土器群は須恵器模倣の土師器である。1～18は7世紀後半に見られる土器群である。須恵器蓋においても器種分化が見られることが解り、土師器の小型壺や小型で短脚の高坏をみることができる。また、作りは粗雑であるがつまみをもつ土師器蓋も出土している。19～28は、8世紀前半に該当し、蓋、小型丸底壺、鉢、壺等が確認できる。8世紀においても土師器の器形は須恵器を忠実に模倣していることが理解できる。こうした現象は、土師器生産に携わる工人の意識に須恵器思考の存在を否定しきれず、土師器工人が須恵器生産や須恵器工人と密接な関係にあったことを示唆している。と同時に生産をコントロールする側と製品を使用する側の意識にも模倣の観念は強く存在していたと考えられる。

まとめ

土師器の供膳具および貯蔵具の形態は須恵器の影響を大きく受けていたことが理解できた。こうした現象は、古墳時代後期の連続的傾向として位置づけられる。しかし、7世紀の大きな変化はやはり金属器の及ぼした影響であろう。一つには、同一器種による法量の変化と器種のセット関係の完成である。特に、北武蔵における土器様式の成立を見ると、坏・皿・鉢・蓋・高坏・小型壺（薬壺）・壺・甑・小型甕の器種がこの段階に成立している。これらの器種セットは土師器に影響を与えた須恵器においても見られ、両者が同一のプロセスの中に置かれていたことを示唆している。こうした理解のもとで成立した土師器が律令的土器様相であると考えられる。



第６図　須恵器と土師器

註１　時間軸を表現するために第１期から第13期まで段階を設定した。この段階についてはすでに報告した『将監塚・古井戸遺跡』歴史時代編Ⅱにおいて土器編年を試みその中で７世紀中葉から10世紀前半の時期設定を行った。この段階をそのまま使用している。

註２　中村倉司氏はすでにこうした視点で８世紀初頭から10世紀前半の集落である『白山遺跡』の出土遺物を分析し、それぞれの器種を供膳・貯蔵・煮沸形態に分類しその推移を捉えている。このなかで、甑の減少は木製甑の出現に因るものではないかと指摘した。

註３　富田和夫氏のご教示によれば坂戸市稲荷前遺跡においても皿Ｂの出土が確認できる。稲荷前遺跡は現在埼玉県埋蔵文化財調査事業団により整理中である。

参考文献

赤熊浩一　1988　『将監塚・古井戸Ⅱ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集

井上尚明　1986　『将監塚・古井戸Ⅰ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集

富田和夫・赤熊浩一　1985　『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群他』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集

井上尚明　1988　「７世紀における集落の再編成とその背景」『埼玉県史研究』　埼玉県

中村倉司　1989　『白山遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査報告第17集　埼玉県教育委員会

中村倉司　1987　『下辻遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第69集

瀧瀬芳之　1990　『東川端遺跡』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集

篠崎　清　1990　『皀樹原・檜下遺跡Ⅱ』（奈良・平安時代編Ⅰ）皀樹原・檜下遺跡調査会

鬼形芳夫　1986　『内出遺跡』　内出遺跡調査会

西　弘海　1986　『土器様式の成立とその背景』　真陽社

綿貫邦男　1988　『鳥羽遺跡』　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

井川達雄　1985　『三ツ寺Ⅲ・保渡田Ⅲ遺跡』　群馬県教育委員会

桜岡正信　1991　「７世紀以降の土師器坏の画期とその要因について」『群馬考古学手帳』２

研究紀要　第8号

1991

平成3年10月28日　印　刷

平成3年11月1日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493—39—3955

印　刷　誠美堂印刷株式会社